

# プロローグ

漢字は文字である。文字なのだからそれを書き連ねた文章で何をか表現する手段である。洋の東西を問わずそういうものを文字という。

ところが漢字には一大特徴があって、表意文字である。いま楷書が日常の書法の基準になっている観がある。漢字はこの書法では正確に字形に意味を反映していないという意味で擬似表音文字になっているが、でもその字形から意味がまだなんとか読み取れる。

メソポタミアの楔形文字は初め表意文字だった。エジプトのヒエログリフもそうだった。それが後を襲った周辺の異民族の間でも使われていく間に、「字形 = 意味」が薄れ表音文字化していった。文字はみんなそういう流れをとっている。

中国の場合は漢字を発明した王朝が長く続いていないが、その後を受けていった異民族の王朝は決して表音文字にしなかった。むしろさらに周辺にいた民族は西夏文字や蒙古文字のようにその発想を取り込んで民族自らの文字体系を作っている。

韓国のハングル文字も構造的にはこの部類である。朝鮮国は漢字を日本で言う万葉仮名的(吏読)に使ったが、のちハングルという表音文字に展開した。日本は万葉仮名から、漢字の草体や部分をちぎって形を作り、もとになった漢字の音をそれに当てて平仮名とし表音文字にしている。(最近、韓国で仏教典への僧侶の書き込みがカタカナに類似しているという発見があったから片仮名は日本のオリジナルではないかもしれない)

しかし、世界の文字情勢がどうであろうと漢字は頑固に表意文字でありつづけた。漢字の字形を決める方法が続く時代の情勢に対応できて、より複雑な意味をも表すことができたからだろうか。

漢字 1 字は英文字の 1 センテンスである。日本語で「あう」という概念を示す漢字は「合、逢、遇、会、遭」などがある。たくさんあるが意味合いが違う。形容詞・副詞をつけなくても漢字を選択することで裏にある感情・状況も表現できる。

飲み屋の名前だってたった 1 字の漢字で店のイメージが形作られる。掛け軸にたった 1 字で喜怒哀楽を表現できる。方形の中に書かれる 1 図形が 1 つの宇宙を持っているかのようだ。

そしてちょっとした形のの違いで意味を変える事すらできる。

こんな状況だから、ある 1 字の漢字の字体(字形)に関して種々ご意見があることがある。字体(字形)の違いが意味の違いにまで及ぶ字体論の世界での議論百出はよくわかるが、書き

方で発生する形の違い（つまり意味の違いがない字形上だけのマイナーチェンジ）例えば明朝体・楷書体・行書体の字形の違いにまで価値観を持たせようとする傾向がある。

字形は小学校時代に理屈抜きに絶対的真理として刷り込まれたものだから、その認識は単純な論理思考ではなく、人生観や感情が混じり始末に終えない。ちょっと違う字形に対しての反応は複雑であるのは事実である。

あるフォントベンダーにいて、お客様からこのあたりの様々なご意見をうかがってきた。

どんなに調べても、実際新しいフォントを世に出すと必ずといってよいほど字体に関する苦情がくる。一番困るのはあるひとつの立場に立った意見だ。その立場自体が証明されているわけではない。砂上楼阁上の意見だ。それに対して、対応する私たちが正対する考え方にいれば当然聞き入れられない。だが、こちらも砂上楼阁上にいる。この方たちを説得するには多くの漢字の周辺知識が必要になる。だからいろいろ調べまわった。

そんなことでやたらと漢字に周辺の話が脳みそにたまった。そろそろ少し出しておかないと私の小さな脳みそがパンクしそうだ。捨てるのももったいないので書き残すことにした。

いかにも学術的に書いているふりをしているが、実は横丁のご隠居の蘊蓄話である。そのところをよくお心得の上お読みいただきたい。

この著作権は岡和男に帰属します。  
©Kazuo Oka 2000